

# 談話行動におけるあいづち

## — 円滑な会話の妨げとなり得る要因 —

その1: あいづちの頻度(frequency)に基づく視点より

元ワルシャワ大学

川手・ミヤジェイエフスカ 恩

### 0. はじめに

今から、十年以上も前のことであるがアメリカに住んでいた頃、北米英語母語話者とのコミュニケーションがどうもうまくいかないのは、文法の間違いや不適當な発音（この発音に関しては、不適當と言うよりむしろterribleと言ったほうが正しいのだが）ばかりではなく何か他に要因があるのではないかと考え始め会話におけるあいづちのもつ役割に関心を持ちはじめた。後に分かったことであるが適當なあいづちが打てなかったため誤解されていたこともあったようだ。（残念ながら、長くなりそうなので詳細は省略）

このような些細なきっかけで、日本語教育においても、会話におけるあいづちのもつ役割の重要性を考える必要があるのではないかと思ひ始めた。あいづちには、個人差があり日本語母語話者同士の会話においてもいろいろなパターンが伺え、かつ同一人物でも状況や会話の相手、会話の内容によってあいづちも異なってくるが、日本語教育において、外国語もしくは第二言語としての日本語のあいづち指導の在り方を探ってみる必要がある。

あいづち指導の在り方を探ってみるうえであいづちの持つ三つ要素、あいづちの頻度、種類、そしてタイミング(placement)を考えなくてはならないのだが、本稿では、アメリカ英語母語話者と日本語母語話者による日本語での会話を例にとり、三つ要素のうちの一つであるあいづちの頻度を機能にもとづき分析し、円滑な会話の妨げとなり得る要因を探る。

### 1. 先行研究と目的

異文化間のあいづちの研究では、1970年代にPhillips(1974)がWarm Spring Indiansと北米英語母語話者たちの間ではあいづちの打ち方がかなり異なることを報告している。Erickson (1979)は、アメリカ英語を母語とするBlackとWhite Speakersの間のあいづちの打ち方を研究し、それぞれの文化に根差したあいづちの打ち方があることを明確にし、それらはかなり異なり時として誤解や、円滑な会話の妨げとなり得る要因であるということを目指した。また、あいづちの量の研究では、被験者、会話の内容、状況、使用言語などで頻度が異なるので一概にはいえないが、日本語母語話者は非日本語母語話者、もしくはアメリカ英語母語話者よりあいづちを頻繁に打つという傾向が指摘されている (Maynard, 1986; Locastro, 1987; White, 1989; 堀口, 1990; 渡辺, 1994)。堀口(1990)によれば、日本語母語話者は日本語上級学習者同士(国籍不明)の会話にみられたあいづちの五倍のあいづちを打つと言う。White (1989)は、英語によるアメリカ英語母語話者同士と日本語による日本語母語話者同士のカジュアルな会話、そしてアメリカ英語母語話者と日本語母語話者の、英語によるカジュアルな会話を分析し日本語母語話者は話す言語に関係なくアメリカ英語母

語話者より頻繁にあいづちを打ったと報告している。

本稿では、先にも述べたように日本語母語話者とアメリカ英語母語話者による日本語での会話を例にとり、あいづちの頻度をその役割に基づく視点より分析し、誤解や円滑な会話の妨げとなり得る要因を探ることを試みる。

## 2. あいづちの定義

バック・チャンネルというタームを最初に使用したYngve(1970) はあいづちとは話し手のターンのなかで、話し手が聞き手より受けとる「はい」とか「ふん」、「ふうん」とか言うような短い対応であると定義づけている。また、DuncanとFiske(1977) は、あいづちを五つのカテゴリーに分け、(1) 「はい」、「ふん」、「ふうん」というグループ、(2) 話し手の文末を完成させるもの<sup>(1)</sup>、(3) 「はい?」とか「すみません」の様に話し手にもう一度聞き返すもの、(4) 先行する話し手の言葉を手短かに繰り返したり言い換えたりするもの<sup>(2)</sup>、それから(5) うなづいたり、首を横に振ったりするような非言語的行動、とした。

本稿においては、Yngve(1970) の定義を採用し、DuncanとFiske(1977) によるところの最初のグループである「はい」、「ふん」、「ふうん」というものをあいづちとする。<sup>(3)</sup>

また、笑いなどとして現れた表現もあいづちと考えた。

ここで、あいづちの分析において特に注意を払った問題点を指摘しておく。まず、下記の例1 にみられるように (Appendix 1 for *transcription conventions* 参照) 聞き手の対応が明らかに話し手の質問に対する返答であり特定の意味を持つものは、Schegloff(1981) のように聞き手のターンであるとし、あいづちとは考えなかった。

### 例1<sup>(4)</sup>

ハル： 最近さあ：：： [↑：(.)] 何か：：：楽しい=  
ジョー： [あ：]  
ハル： =ことあった?  
ジョー： 楽しいこと?  
ハル： →うん。

次に例2 に見られるように聞き手のターンの直前に打たれるあいづちは、聞き手のターンの一部分と考えられるので本試みにおいてはあいづちとして扱わなかったが例3のように聞き手のターンの前に打たれてはいるが直前ではなく、いくらかの間があるときはそれは聞き手のターンの一部分ではなく、Maynard(1986) がいうように聞き手の話し手に対する対応と考えあいづちとした。

### 例2

ハル： =※って [いう] か※  
ジョー： [うん。]  
ハル： →ふう：：↑：ん、それで (.) それってメイン大学だよな?

### 例3

ジョー： あのファックスも受信したし。  
ハル： →うん。(.)5) それでどうする? \*hh。

### 3. 方法

**被験者** アメリカ英語を母語とする二十代の男性と日本語を母語とする三十代の女性がこの試みに参加した。男性の方は日本語学習歴が七年ありかなりの上級者でこれに参加するまでに日本に二年程滞在していた。また、日本語母語話者の友人も多く勤務先でも日本人の同僚たちとは日本語で話している。他方、女性の方はビジネスをしていて、七年間程大学生に日本語を教えた経験を持っていた。また仕事の関係上英語を使う機会も多々ある。

このアメリカ英語母語話者と日本語母語話者はこの試みに参加するまでに六カ月程の友人関係を持つ。ここで、被験者の性が異なること、そして日本語母語話者の過去における日本語教授経験よりくるアコモデーション等は、実験の結果に影響を与えるかも知れないと言うことを指摘しておきたい。また被験者の数が少ないことより結果の一般化はできないと言うことも付け加えておく。

**マテリアルと過程** アイワのテープリコーダーで録音された35分の会話の中の12分10秒が分析された。会話はカジュアルなもので、アメリカ英語母語話者の日本語学習歴、日常生活での出来事、勤務先での出来事、日本語母語話者のビジネスでの出来事、異文化理解についてなどを話していて、ごく自然などこにでも見られるような友人同士のものである。これは、テンプル大学ジャパンの教室にてテープリコーダーをまん中においてテーブルをはさんで座って雑談をしている友人同士の会話を録音した。会話に関する指示は全く与えられず普段通りに話したいことをはなして貰った。(自然な会話を分析してみた。)

**分析** Schegloff, Sacks, and Jefferson(1974, 1977)に代表される会話分析(*Conversation Analysis*)に依存し、Sinclair and Coulthard(1975)やCoulthard(1985)に代表される談話分析(Linguistic Approach, i.e., Discourse Analysis)の形をった。また、あいつちの頻度に関する数量的な試みにおいて、それを統計的に分析するにあたって、Yate's Correctionと共にOne-way Chi-squareテストを使用した。

### 4. 結果と考察

分析の結果、アメリカ英語母語話者(以下:AE)は、日本語母語話者(以下:JA)の1590音節の会話に対して39回のあいつちを打ったのに対してJAはAEの2489音節の会話に対して148回のあいつちを打った(表1)。AEのターンの方がJAのより長かったのであいつちの量を比べるために、100音節に換算するとAEは2.45回あいつちを打ったのに対してJAは5.95回と言うことになる。つまり、JAはAEのほぼ2.4倍のあいつちを打ったことになる。そこでこの数字が統計的に重要であるか否かを調べるために表1に示すようにAE、JAがそれぞれ2489音節に対してはどれぐらいのあいつちを打ったのかを計算してみるとAEは61.23回でJAは前出したように148回であった。この数値に基づいてYate's Correctionと共にOne-way Chi-squareテストを行ったところ、2.4倍というこの数字は重要であるという結果がでた( $X^2 [1, N=2] = 28.168, p < .01$ )。この様にして、この様な小規模な試みにおいても日本語母語話者はアメリカ英語母語話者より頻繁にあいつちを打つということが分かった。

それではここで結果を導いたと考えられる要因をまず、アメリカ英語母語話者と日本語母語話者の両視点から考えてみる。White(1989)によれば、アメリカ英語母語話者は日本人

表1 アメリカ英語母語話者と日本語母語話者による  
カジュアルな会話におけるあいづちの量

	アメリカ英語母語話者 N = 1	日本語母語話者 N = 1
会話における 全音節数*	2489	1590
あいづちの回数	39**	148
100音節における あいづちの回数	2.45***	5.95
2489音節における あいづちの回数	61.23****	148

(X<sup>2</sup> [1, N=2] = 28.168, p < .01)

\* 会話のフルターンと考えられるものみの音節、つまりあいづちと考えられるものは除く。

\*\* 日本語母語話者の1590音節に対して39回のあいづちが打たれた。

\*\*\*  $39 \times 100 \div 1590 = 2.45$       \*\*\*\*  $39 \times 1.57 = 61.23$  もしくは  $2489 \div 1590 \times 39 = 61.23$

との英語での会話では日本人に合わせてあいづちを頻繁に打つと言う。つまり、このAEは、日本人と英語で話すときはあいづちの回数を増やすかも知れないのに(仮説)、日本語での会話ではあいづちは増えてなかった。(AEの英語での日本人との会話を分析して見なくてはならないのではあるが)これは、Ferguson(1975)が指摘するように非母語話者にとってリスニング・スタイル、つまりここではあいづちの量、を調整するのは難しいのかも知れない。

次に、JAによるアコモデーション説も捨て難いものである。水谷(1988)によれば日本人同士の会話では100音節あたり5回のあいづちが打たれると言う。また、渡辺(1994)は、日本語母語話者は100音節あたり5.5回のあいづちを打つと言う。しかし、この試みによるJAは、5.95回のあいづちを打った。つまり、JAはAEと日本語で話すときAEに「聞いているよ」、「おもしろいよ」とか、「もっと話して」と言うようなあいづちの機能がはっきりと伝わる様に日本人と話すときよりあいづちの量を増やしたのではないだろうか。ここでもJAの普段の日本人とにおける同じような条件での会話を分析してみな

いとはっきりとは言えないが、アコモデーションについても可能性としてあげておきたい。

また、母語話者にとってリスニング・スタイル、つまりここではあいづちの量、を調整するのはたやすいことなのかも知れない。

それではここで、日本語におけるあいづちの果たす役割と異文化コミュニケーションにおける円滑な会話の妨げとなり得る、また誤解を招く要因について探ってみる。

まず、JAによる頻繁なあいづちに関してであるが、水谷(1983)は英語母語話者はこれをはなしを早く終わらせようと急ぎ立てているように解釈するかもしれないと言う。これに対して、White(1989)の実験に参加したアメリカ人は日本語母語話者の頻繁なあいづちを、礼儀正しくて真剣によく話を聞いてくれると解釈している。この頻繁なあいづちに関しては異文化間の会話を分析すると同時に被験者にインタビューしたりアンケートとったりすれば<sup>(5)</sup>、もっとはっきりしてくるだろう。さてここで、もし、水谷(1983)のいうように英語母語話者があいづちをはなしを早く終わらせようと急ぎ立てているものとして解釈してとすればこれは大変な誤解となる(もちろん急ぎ立てるために打たれるものもあるのだが)。それでは、なぜ日本語母語話者はあいづちを頻繁に打つのであろうか。Locastro(1987)は、あいづちは日本人の和を尊ぶ気持ちに反映し、会話においても、聞き手は話し手とうまく調和をとり、会話を気持ちよく促進するために頻繁に打たれるという。また、これは、日本語においてはあいづちを打たないと話し手に失礼であるという考えに支配されているのかもしれないとも言っている。この他、日本語のシンタックスにも大きく関係してくるであろう(これに関しては別の分析が必要となるが。)

さて次に、少ないあいづちについてであるが、これについてちょっとした調査を試みた。英語を話した経験のない3人の日本人教師によると、もし非日本語母語話者と話していて彼等・彼女らのあいづちが日本人のそれよりかなり少なかったら、それは、(1)聞いていない証拠、(2)話しの内容が分かっていない証拠、そして(3)彼等・彼女らの日本語の力不足と解釈すると言う。最後の(3)については、先行研究より日本語の発達段階は、あいづちの頻度とは関係ないと言う結果がでている(Locastro, 1987; 渡辺, 1994)ので除外すると、異文化間の会話においてはどうも、(2)が少ないあいづちに関係があるように思われる。そしてこの試みの日本人被験者も、聞き手のあいづちの頻度が少ない時は聞き手が会話の内容を十分理解していないんじゃないかと思ったと言っているが、聞き手であるジョーのほうはどうやら話の内容は分かっているらしい。この(2)に関連して、Ericson(1979)の研究によれば、異文化間における少ないあいづちは聞き手が会話の内容を理解していないのではないかと解釈されがちでそれが必要以上の説明(Hyperexplanation, p.110)を引き起こし、ひいては円滑な会話を妨げてしまう。以下その必要以上の説明(Hyperexplanation)についてこの試みでみられた会話の一部を抜粋してみる。

#### 例4

1 ハル: "It's top secret" ※って※ ((cough)) あ hh [ふっふっふ]。 =

2 ジョー: [はっはっはっ。]

- 3 ハル： =\* hhh, それってやっぱりおこるかね： (.) そのチェアーマ  
ン？ ↑
- 4 ジョー： その人が？
- 5 → ハル： うん。 [何か] ※彼※ むっとしたんだ [よね。] ↑
- 6 ジョー： [ふう： : ん。]
- 7 ジョー： [あゝし] ん用 (.2)  
しないから？
- 8 → ハル： hh。 その私(.1)だから： (.3) ね= ↑
- 9 ジョー： う： : : 。
- 10 → ハル： = "It's top secret" っていったらさ： : =
- 11 ジョー： う [ん。]
- 12 → ハル： = [か] れ 凄い怒ったんだ※よね。 ※ =  
(.3) ↑
- 13 ジョー： hhh \* hh。
- 14 → ハル： =むっとなったから あ：あ：あ：あ： (.) > ※あ：※< ちょっと冗  
談です※って※いった↑ら > そう※し※たら< あ：ん： : : いや↑ :  
↑  
: "That's a Japanese joke, a↓ha?" とかって ゆう↑ : : の↑よ。

例4 では、表1 と日本語のあいづちの特徴（堀口、1988；今石、1992）に基づいて↑を用いて日本語母語話者があいづち打つだろうと予測されるところを、前出の日本人教師三人の同意を確認してから表してみた。この結果、A Eのジョーはあいづちを打つ頻度が少ないようだ。そして、これの少なさがJ Aのハルによる必要以上の説明（Hyperexplanation）につながるようだ。ハルは、8, 10, 12 行目にみられるように同じようなことをもう一回説明したり、むっとした、怒った、むっとなった、という 5, 12, 14行目にみられるように同じ意味の言葉を言い換えたりしている。この為、会話がスムーズに進まず、壊れたテープリコーダーのようにまわっているような印象を与える。このA Eのジョーによるあいづちの少なさをJ AはA Eが話の内容を理解してないのではないかと解釈した。この様にして、あいづちの頻度の少なさは円滑な会話を妨げてしまう。

## 5. おわりに

以上吟味してきたように、あいづちの役割とその頻度と言う視点からあいづちを考えて見ると、少なくともこの試みにおける、アメリカ英語母語話者と日本語母語話者の日本語での会話ではあいづちの頻度の少なさは円滑な会話を妨げてしまうようである。

今後の課題として、被験者、会話の内容、状況、などをかえて同じような試みを繰り返し、(ビデオテープによるものも含め) 今回の試みにより得られた結果がどこまで一般化できる

のか検討していきたい。

最後に、日本語のあいづち指導の在り方を探ってみるためにもただあいづちの頻度を数えるだけでなく、会話を細かく分析してみる必要があるのではないか — 特に教壇にたつ教師による学習者たちのあいづちの打ち方に関する系統だった研究は大切なのではないだろうかと考えるものである。

## 注

- (1) 文末完成: A: きとう あれからまた [ . . . . . ]。  
B: → [電話あった] ってこと?
- (2) A: 先日社用でニューヨークに=  
B: → ニューヨークに?  
A: =いったんですが、 . . . . .
- (3) Duncan & Fiske (1977) による (2)、(3)、(4) はあいづちであるのか、聞きてのターンであるのかの区別が難しいため除外した。また、(5) に関してはあいづちについて語るうえで必要不可欠とは考えられるが、ビデオテープによる録音をしなかったため、分析不可能ということになった。
- (4) 本稿におけるすべての例題は (注は除く)、今回の試みにみられたものである。
- (5) ここではアンケート調査 (questionnaire) における重要点には触れないがインター・アイテム・コーリレーションなども含めアンケートの信頼性また結果の有効性を高めるべくアンケート作成の手順を踏まえなければならないことを強調しておきたい。

## 参考文献

- (1) Couthard, M. (1985). *An introduction to discourse analysis*. New York: Longman
- (2) Duncan, S., & Fiske D. W. (1977). *Face-to-face interaction: Research, method and theory*. Hillsdale, N.J.: Lawrence Erlbaum Associates.
- (3) Ericsson, F. (1979). Talking down: Some cultural sources of miscommunication in interracial interviews. In A. Wolfgang (Ed.), *Nonverbal behavior* (pp. 99-126). New York: Academic.
- (4) Ferguson, C. A. (1975). Toward a characterization of English foreigner talk *Anthropological Linguistics* 17 (1), 1-14.
- (5) 堀口純子 (1988) 「コミュニケーションにおける聞き手の言語行動」 『日本語教育』 64号、 13-26.
- (6) 堀口純子 (1990). 「上級日本語学習者の対話における聞き手としての言語行動」 『日本語教育』 71号、 16-32.
- (7) 今石幸子 (1992). 「談話における聞き手の行動—あいづちのタイミングについて—Behavior of listeners in discourse on timing in backchannels」 『日本語教育学会創立30周年・法人設立15周年記念大会 予稿集』 147-151.

- (8) LoCastro, V. (1987). Aizuchi: a Japanese conversational routine. In L. Smith (Ed.), *Discourse across culture*. New York: Prentice Hall.
- (9) Maynard, S. (1986). On back-channel behavior in Japanese and English casual conversation. *Linguistics* 24, 1079-1108.
- (10) 水谷信子 (1983). 「あいづちと応答」 水谷修編 『話しことばの表現』 筑摩書房.
- (11) 水谷信子 (1988). 「あいづち論」 『日本語学』 vol.7, 13号.
- (12) Phillips, S. (1974). *The invisible culture: communication in class room and community on the Warren Springs reservation*. Ph.D. dissertation, University of Pennsylvania.
- (13) Sacks, H., Schegloff, E. A., & Jefferson, G. (1974). A simplest systematics for the organization of turn-taking for conversation. *Language* 50, 696-735.
- (14) Schegloff, E. A., Jefferson G., & Sacks, H. (1977). The preference for self-correction in the organization of repair in conversation. *Language* 52, 361-82.
- (15) Schegloff, E. A. (1981). Discourse as an intercultural achievement: some uses of uh huh and other things that come between sentences. In D. Tannen (Ed.), *Georgetown University round talk on language and linguistics 1981*. Washington, DC: Georgetown University press.
- (16) Sinclair, J. McH., and Coulthard, M. (1975). *Towards an analysis of discourse*. Oxford: Oxford University Press.
- (17) 渡辺恵美子 (1994). 「日本語学習者のあいづち分析—電話での会話において使用された言語的あいづち」 『日本語教育』 82号、100-122.
- (18) White, S. (1989). A study of Americans and Japanese. *Language Society* 18 (1), 59-76.
- (19) Yngve, V. H. (1970). On getting a word in edgewise. *Chicago Linguistic Society* 6, 567-578.

#### APPENDIX 1

- [ ] 左側のカッコは会話のオーバーラップが始まるポイントで、右のほうはオーバーラップの終りを示す。
- (0. 0) 1/10秒で示した沈黙の長さ
- (.) マイクロ・ポーズ (untimed)
- ↑↓ イントネーションの顕著な上がり下がり (これは、方言の違いからくるイントネーションの違いではない)
- :: 長音
- = *Latched* utterances. 1) 通常以上の間があるもの、そして 2) 聞き手があいづちを打ったが話し手のターンが続いているとき。



? Rising イントネーション  
( ( ) ) 会話を取り囲むまわりの状況や会話以外の雑音  
hh 聞くことのできる outbreath  
\*hh 聞くことのできる inhalations  
> < 会話のテンポが急に早まる。  
※ ※ 前後の会話より声が小さくなっている。